

令和3

小論文 A

〔180点
45分〕

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、白紙を除いて、3ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答は、〔令3 解答用紙〕に記述しなさい。
- 4 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

問題 次の文章を読み、後の問い（問1～問3）に答えよ。

今日の子どもたちは、多様性を否定する画一的な檻おりのなかへ囲い込まれていた時代とは異なって、むしろ多様性を奨励するようになった新しい学校文化のなかを生きています。学校の教師にも抑圧性を感じなくなり、仲間で団結して立ち向かう敵とはみなさなくなっています。そのため、学校文化に反旗を翻ひるがえすことで成立してきた非行文化は、その基盤を徐々に失いつつあります。

しかし、いくら多様性が賞揚されるといっても、あらゆる個性のあり方が学校で受容されるわけではありません。そもそも周囲の期待にそうものでなければ、その個性が肯定的な評価を受けることはありません。とりわけ学校は、他人との密接な関係をなせば強制された空間です。そのため、今日の子どもたちは、かつてのように画一的な評価の物差しを押しつけられなくなった代わりに、今度は、身近にいる個別の人間から逐一に評価を受けざるをえなくなっているのです。

多様な個性のあり方が賞揚される現代では、普遍的で画一的な物差しによってではなく、個々の場面で具体的な承認を周囲から受けることによって、自己の評価が定まることとなります。平たくいえば、そこでウケを狙ねらえるか否かが、自己評価にあたって重要な判断材料となるのです。しかも、客観的な評価の物差しがそこに存在するわけではありませんから、相手がどのような反応を示すかは前もって予想しづらく、評価された結果を待つて初めて判断されることとなります。すなわち、自己承認を得られるか否かは、その時になってみなければ分からないのです。

かつて、社会の側に安定した価値の物差しがあった時代には、時々の場の空気や気分などによって、個々の評価が大きく揺らぐことはありませんでした。だから、周囲の人びとによる一時的な評価を過剰に気にかけたり、それに翻弄ほんろうされることも少なかったといえます。場合によっては、「我が道を進む」と孤高にふるまうことすらできました。社会の物差しを自らの内面に取り込み、それを自分の物差しとすることで、自己肯定感の安定した基盤を確保できたからです。また、そういった支配文化に違和感を覚えていた少年たちも、対抗文化の物差しを自らの内面に取り込み、それを自分の物差しとすることで、自己肯定感の安定した基盤を

確保することができました。いずれにせよ、⁽¹⁾自分が属する文化の正当性に裏づけられたジャイロスコープ（回転儀）が自分の内部で作動していたので、それを支えに一人で立っていることも容易だったのです。

しかし、人びとの価値観が多元化し、多様な生き方が認められるようになった今日の社会では、高感度の対人リーダーをつねに作動させて、場の空気を敏感に読み取り、自分に対する周囲の反応を探っていかなければ、自己肯定のための根拠を確認しづらくなっています。いわば内在化された「抽象的な他者」という普遍的な物差しが作用しなくなっているために、その代替として、身近にいる「具体的な他者」からの評価に依存するようになっていっています。

今日の若い世代が、ケータイの「圏外」表示に強い不安を感じ、友だち関係から疎外されることを過度に恐怖するのは、このような理由によるところが大きいと思われれます。身近な人間から受ける個別の評価が圧倒的な力を持ち、そのために人間関係の拘束力がかつてよりも大幅に強まっているのです。KYという言葉は、まさにその生きづらさを象徴しているように思われます。

誤解のないように述べておきますが、かつてのように規範の拘束力が強かった時代のほうが、子どもたちは幸せだったと述べているわけではありません。その時代は、画一的な物差しを強引に押しつけてくる社会の抑圧力が非常に強く、当時の子どもたちは、その抑圧力のなかで鬱積^{うっせき}した生きづらさを抱えていたはずで、特定の枠組を強制されるうっとうしさから解放され、多様な生き方が認められるようになったという点では、現代のほうがはるかに生きやすい時代でしょう。

今日の問題は、多様性の賞揚に由来する新たな困難が、⁽²⁾身近な人間関係の拘束力の強まりというかたちで表われている点にあります。ですから、過去と比較して、生きづらさが増大しているか否かを問うことには意味がありません。むしろ、その生きづらさの性質が、社会の拘束力の強さにもとづくものから、人間関係の拘束力の強さにもとづくものへと、時代とともに変化している点に目を向けるべきなのです。

（土井隆義『キャラ化する／される子どもたち―排除型社会における新たな人間像』岩波書店、二〇〇九年、一四〇―一七頁による。）

（注）ジャイロスコープ：上下完全に対象な独楽^{こま}の回転が、三つの軸の方向に自由度を有するようにした装置。独楽を回転させれば、その軸は空間に対して一定の方向を保つ。

問1 傍線部(ア)「対抗文化の物差し」とはどういうものか。本文の内容に即して五〇字以内で説明せよ。

問2 傍線部(イ)「自分が属する文化の正当性に裏つけられたジャイロスコープ(回転儀)が自分の内部で作動していた」とはどういうことか。本文の内容に即して一〇〇字以内で答えよ。

問3 傍線部(ウ)「身近な人間関係の拘束力の強まり」が今日の問題であると筆者は述べている。このような状況を乗り越えるために、学校教育で教師は具体的にどのようなことをすればよいと考えるか。二〇〇字以内で述べよ。